

# 菊竹清訓初期の言説における「建築」と「人間」の関係

湯浅 和也\*・河田 智成\*\*

(令和元年10月31日受付)

## On the relationship between “architecture” and “human being” in the early discourses of Kiyonori Kikutake

Kazuya YUASA and Tomonari KAWATA

(Received Oct. 31, 2019)

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the relationship between “architecture” and “human being” considered by Kikutake, and to structurize his concepts regarding it. This study targets 1 to 7 (excluding 5) of “Kikutake Kiyonori / Works and Methods” included in “Architecture” published by SEIDOUSYA. As a method, I will look at the way Kikutake perceived “human being” in his discourses about design hypothesis. In his published “human being” is the primary concept in architecture and also the basic point of direction in design concept.

**Key Words:** Architecture, human being, form, equipment, nature

## 第1章 はじめに

### 1-1 研究背景

菊竹清訓 (1928-2011) は、作品や思想によって日本の建築界に大きく影響を与え、高度経済成長期の日本を支えた建築家である。設計の三段階論「か・かた・かたち」を提言し、メタボリズム運動の第一人者として数々の作品を発表した。菊竹のように、思想と作品の両面において大きな影響を残した者は、そう多くはないだろう。しかし、現在出雲大社庁の屋や都城市民会館などの解体工事が進んでいる。菊竹の思想をこれからの時代に繋げて行くためには、菊竹建築の本質を把握する必要があると考えられる。菊竹の言説を読み解くことで、菊竹が設計に用いた手法を本質的に理解することができるのではないだろうか。

### 1-2 研究対象・目的・方法

菊竹は、事務所を立ち上げてから初期の段階で「スカイ

ハウス」「出雲大社庁の舎」「東光園」など、多くの代表作を手掛けた。よって、60年代から70年代初期は菊竹が活発に主要作品を発表していた時期である。更に、この時期に刊行された主著である『代謝建築論』(彰国社、1969)によって、多くの建築家に影響を与えた。

本稿では、青銅社刊『建築』誌に掲載された、初期の菊竹の思想が集約されている「菊竹清訓／作品と方法」の1から7 (5は含まれない) で展開された彼の言説を対象とする。「菊竹清訓／作品と方法」は、菊竹自身の作品の紹介と、設計に対する方法論が記載されている。その1と2で、自身の設計仮説である秩序と典型と形態の3段階の設計仮説について述べている。その設計仮説の展開として、3と4で「空間装置と生活装置」について述べており、さらに、7では「アーキナティクス」などの考えを論じている。これらの言説では、度々「人間」について論じている。本稿では、菊竹の捉える「建築」と「人間」について、この資料の流れに沿って分析してみたい。なお、「菊竹清訓

\* 広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻博士前期課程

\*\* 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

／作品と方法」その1から7については、以下、「方法1」から「方法7」などと表記する。

菊竹初期の言説における「建築」と「人間」の関係性を明らかにし、これに関連する諸概念を構造化するのが、本稿の目的である。これによって、初期作品における菊竹の設計理念が、形態のみならず、人間の本质から構想されていたことを明らかにしてみたい。

方法としては、まず菊竹の設計仮説に関する言説から彼が人間について、どう捉えていたかを考察する。つづく各章において、対象とする菊竹の言説における「建築」と「人間」の関係に着目し、そこで展開されている考えを設計理念と照らし合わせる。基盤となる設計理念とその展開となる考えから「建築」と「人間」の関係性を考察してみたい。

### 1-3 既往研究

菊竹の思想について様々な研究があるが、本研究に最も近い研究として、次のような報告がある。

藤田 英介他「菊竹清訓の三段階理論「か・かた・かたち」の初源的意味：ルイス・カーンとの関係性を軸として」『日本建築学会関東支部研究報告書』75号、2004年、489-492頁。

この研究は、菊竹の三段階理論「か・かた・かたち」の考えとルイス・カーンとの関係性を軸として、菊竹の建築の原点を探るものである。本稿では「菊竹清訓／作品と方法」を対象にし、菊竹の捉える「建築」と「人間」の関係性について考察し、最終的に菊竹の初期作品における、設計概念の全体像を構造化する。

## 第2章 設計仮説について

### 2-1 「形態」について

菊竹は、自身の設計仮説として3つの段階的な考えに基づいて、建築の創造過程を述べている。それが、秩序と典型と形態の3つの関係性についてである。これがのちに「か・かた・かたち」の3段階の設計仮説となる。菊竹は創造のプロセスについて、秩序が典型をとおして、形態になると述べている。これを言い換えると秩序は人間の欲求として典型を作り、典型の展開として形態にたどりつくのである。つまり秩序は、人間の欲求として形態を生み出そうとするが、そこには、典型が必要不可欠であると考えられる。では、典型とは何か。典型とは、空間と機能の結合関係である。この空間と機能をいかに結び合わせ、いかに関係づけるかが、建築家の役割であると菊竹は述べている。

ここでは、創造というものが人間の欲求から始まり、その過程において典型を発見し、形態を生み出さなければ、

人間の感動する形態は生み出せないと読み取れる。これは、建築に限られたことではない。秩序と形態を繋ぐ典型が菊竹にとっていかに重要かがわかる。のちに、菊竹は主著『代謝建築論』（彰国社、1969）で秩序・典型・形態を構想・技術・形態と言い換え、3段階の設計仮説をより実践的な考えで述べている。菊竹は、その3段階の設計仮説と人間の3つの物的環境と照らし合わせて、図1のようなかたちの三角構造を示す。この図の特徴は、底辺の概念が究極的に頂点の環境を指向するものであると関係付けられているところにある。

次節からは、菊竹の形態と関連する諸概念の関係について分析を行う。

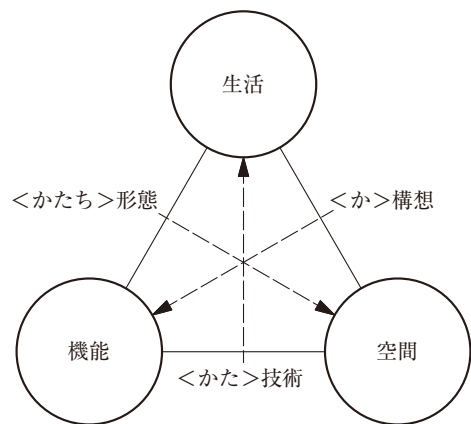


図1 かたちの三角構造

### 2-2 「機能」について

まず、「機能」と「形態」に関する言説に着目する。

実在する形態はすでに、機能と形態が一体にむすばれた、かつて生々としていた形態ではない。それは抜殻のような形態なのである。私はこれを「機能をすてた空間」とよびたい。時間が、人間とのかかわりあいを拭いさり、機能的にも、形態的にもみることのできなくなったただの空間に、静かにかえていくのである。気がつかなければ、そのままいつまでもそこにある。それは空間なのである。ではそうした空間に一体どうして感動したり、刺激を受けたり、啓発されたりするのであろう。それは空間に新しく機能を発見するからである。（方法1、73頁。）

この言説によれば、形態とは、機能によって生み出されるが、その機能は時間と共に消え去り、ただの空間になる。そこに人間が新たな機能を発見すると述べている。

## 2-3 「自然」について

さらに「自然」と「形態」の関係に関する言説が続いている。

形態は機能を媒体とするにすぎない。機能を媒体として生れた形態も機能を失いただの自然にかえるのである。第2の自然であり、人工の自然であって、そのなかに、機能は発見されるものである。自然より、はるかに住みやすい人間のための自然が、そこに発見されるだろう。  
(方法1、73頁。)

ここで菊竹は、形態を第2の自然、人工の自然と言い換えている。ここでは、形態を建築空間という語に言い換えられるであろう。そして、その自然の中に人間が機能を発見し、より人間に適した環境を機能によって、新たに生み出すのである。『建築』「菊竹清訓／作品と方法2」(青銅社、1963. 9)では、「空間は機能をすてる」という主張に関して、菊竹は「機能を発見し、発見した機能をいかに機能させるかという点において、現代の人間の生活を考えたかったから」とその意図を述べている。すなわち菊竹は現代の人間生活における機能を発見し、人間の住みやすい建築空間を求めていたことが分かる。

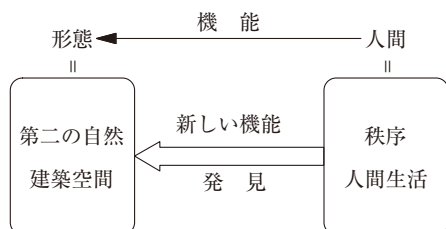


図2 形態の位置付け

## 第3章 人間生活に対応する場の装置について

### 3-1 人間生活に対応する空間装置について

菊竹は、これまでの建築に対する定義として、「文明のパロメーターである」「人間生活のシェルターである」「人間生活の機械である」などを挙げている。しかし菊竹は、現代建築を人間生活に対応する空間装置であると定義づけている。これまで建築の考え方では、都市問題、工業化という問題や現代建築の発展的革新を理解するには難しい。また、発展的建築を捉えることが出来ないと述べている。菊竹は、日常生活などの身近に起こる諸問題に方向性を与え、解決の道を示すものとして、建築を定義づけようとしていた。

次節からは菊竹の空間装置について分析を行う。

### 3-2 空間装置について

まず、空間装置に関する言説に着目する。

私はこの空間装置を二つの装置（空間装置と生活装置）によって作りだされる代謝装置だと考えたい。とくに現代において、そういう理解の重要性は高くなってきていると思われるが、これは建築を建築たらしめるための前提であって、社会の激しい新陳代謝の現象を建築の永久性の否定というように考えないためのものである。空間装置と生活装置を分離し、対立させ、その相対的、段階的關係を問題として意識し、そこに相互的關係および相補的關係をみだし、建築の進化における代謝機構を把えていこうということである。(方法3、80頁。)

この言説から、空間装置とは空間装置と生活装置による代謝装置を指し、菊竹が建築の進化における代謝機構を捉えようとしていたことがわかる。ここでは、空間装置と生活装置による関係性が重要だと読み取れる。

次にムーブネットを生活装置として捉えた言説を引いてみる。

ムーブネットを生活装置としてとらえるのは歴史的に生活と生活の道具との関係が一つになって進展してきているからである。道具の進歩とともに、生活様式が変化しており、生活様式を変化せしめた道具の進歩もまた、決して生活と分離したところではなされない、道具自体の能率をより引き上げるという単にそれだけの歴史ではなかったのである。あくまで、生活とかのかかわりあいを出発点において把え、建築との関係で、建築の次いで、生活の道具として考えたところに進展がみられたのである。(方法3、80頁。)

ここで菊竹は、ムーブネットを生活装置と捉えている。人々の生活は、時代とともに変化していき、その生活における道具も変化に対応すべく進化を続ける。しかし、菊竹はムーブネットを単なる道具として捉えるのではなく、生活の道具として考えることで、建築の進展を見出そうとしていた。つまり、菊竹の考える生活装置とは時代と共に変化し、人々の生活に合わせる装置だと言える。これは、菊竹の機能にあたる概念だと考えられる。

さらに、空間装置についての今後の問題が続いている。

場の装置は、変らない安定した空間装置と機能を系列的に構成した代謝する生活装置という二つの相互關係および結合關係によって、成立するように思われる。とすればそこで、現実の条件なかで、なにが空間装置であるか、

何を生活装置として把えるのかという問題に直面しなければならない。さらに相互の分離した装置の新しい結合関係を探し、それを創造的場の装置とすることを問題にしなければならない。そういう過程において、われわれは現代建築を理解し、新しい人間の空間環境を把握していかなければならないと考える。(方法3、81頁。)

この言説で菊竹は、空間装置を「変わらない安定した装置」と捉え、生活装置を「機能を系列的に構成した代謝する装置」と捉えている。つまりここでの空間装置とは、柱、床、梁、壁などの架構体だと考えられる。そして、現実の中で空間装置と生活装置の位置づけを捉え、二つの装置の結合関係を模索することで、これらが場の装置となると述べている。すなわち、人々の生活によりながら、空間装置と生活装置の関係を時代と共に捉えなければならないことが分かる。

このように菊竹は、建築における場の創造を人間生活から生活装置を読み取り、それと時代に左右されない空間装置との関係を追求しようとしていたことが読み取れた。

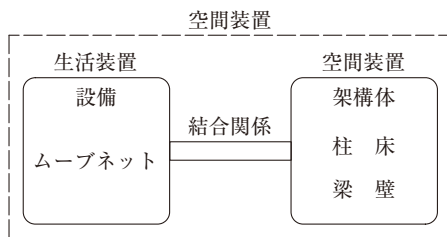


図3 空間装置と生活装置の位置付け

### 3-3 新しい形態について

前節の空間装置に関する言説に続けて、新しい形態について次のように菊竹は述べている。

現代建築において新しい形態は何を基盤として創りだされるかといえ、私はその基盤を二つの機能の調和に求めたい。二つの機能とは<空間装置>と<生活装置>のことである。建築において機能を問題にするとき、この二つは分けて考えることが必要である。そうすることによって、様式主義的アプローチや、タイポロジカルなアプローチの行きづまりを打開しうる第三のアプローチを発見し得るものと確信する。第三のアプローチのテーマは機能の分割とその結合方法にある。そこに新しい調和が追求され、調和が新しい形態の基盤となる。(方法4、26頁。)

ここで菊竹は、二つの機能として区別される空間装置と生活装置の調和によって、新しい形態が創り出されると述べている。ここで言われる機能とは、建築における空間機

能と生活機能をまとめた意味と捉えられる。そして、この考え方は新たな建築に対する第三のアプローチとなり、創造における新たな手段だとされる。すなわち、菊竹は空間装置と生活装置の調和によって新たな形態を生み出すことで、現代建築における設計手法を新たに提案していたと考えられる。

さらに、新しい形態における秩序の展開が続いている。

人間性が建築を方向づけ決定づけるのだといえよう。それが秩序であり構想である。したがって、人間性抜き技術も人間性のない機能もともに無意味であるが、また技術を欠いた人間性も、機能を無視した人間性も同じように無意味である。だからこそデザインの方法論が必要となり、方法論のなかに位置づけられた、技術、機能の認識が重要となってくるのである。人間性は歴史とともに高められ、豊かになっていくものだと思う。古い伝統とは古い秩序であり、新しい秩序は、新しい伝統を創造するであろう。古い伝統からわれわれはこの秩序を学びとるのでなければならない。そして新しい秩序を新しい形態で示すことが求められている。(方法4、27頁。)

この言説で菊竹は、人間性によって建築が方向づけられ、その人間性は歴史と共に豊かになると述べている。そして、伝統こそ秩序であり、われわれは、その伝統から秩序を学ばなければならない。すなわち、菊竹の考える秩序とは建築の根源であり、時代と共に新しくなる人間性こそ新しい形態の基盤であると読み取れる。

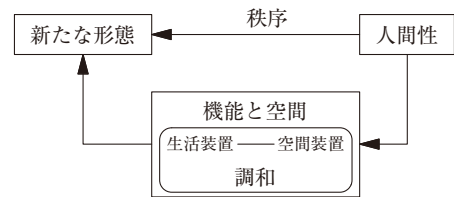


図4 新しい形態と秩序の関係

## 第4章 アーキナティクス

アーキナティクスとは、アーキテクチャーとサイバネティクスの言葉を合わせた菊竹独自の新しい概念のことである。アーキナティクスの基本概念は系、要素、通信の3つであり、それらは様々な構造で結合されている。

菊竹は、アーキナティクスと人間の関係について次のように述べている。

アーキナティクスは、人間生活と空間生活との関係を次第にこうして明らかにしていきながら、建築の設計における<かた>の段階で、制御と通信の法則が支配する複



雑な系として建築をとらえ、その生成の過程を空間モデルとして考えていく方法を有力化する。…中略…人間活動の追求および空間との関係を詳細にみていくということは、人間的環境（最適環境）の実現、しかも調節・制御という問題をとおしていえることは、そこに人間性にたいする深い配慮が必要欠くべからざるものとして浮かんでくるという事実である。（方法7、67頁。）

ここでは、人間生活と空間生活との関係を明らかにしていくのがアーキナティクスであり、この概念が<かた>の段階における建築の設計を有力化する方法であると述べている。そして、この人間性に対する深い配慮こそが必要であると位置付けている。

### 第5章 初期の設計概念とその全体像

菊竹は、建築をめぐる様々な視点から、人間と建築の関係を述べていた。「形態」における「機能」の発見が「人間」であり、その「機能」によって「形態」を生み出すのも「人間」であった。人間によって機能を発見するとは、<か>である秩序が「機能」を発見するものだと考えられる。

そして、「機能」とは人間生活のことを指し、生活装置はその人間生活に応じた装置であり、その装置を機能させるため、空間装置との結合関係を模索する必要がある。空間装置が「空間」に呼応するのに対して、生活装置は「機能」にあたる人間生活に応じた装置であるため、「機能」に呼応すると捉えられる。

また、空間装置と生活装置の調和によって新しい形態が生まれ、これらの調和は人間性である秩序によって方向付けられる。この調和とは、か・かた・かたちの三角構造における<かた>におけるものであることが分かる。そして、<かた>は、究極的に生活を支持するものである。つまり、菊竹が「空間」や「機能」に重きをおいていたのは、変化する人間生活を時代に応じて捉え、建築に採り入れようとしたことだったと考えられる。そして、その調和である<かた>の概念を有力化するのが、アーキナティクスの概念であった。

菊竹は、「方法6」で、自らの建築空間に対する実体験を述べている。それは、戦時中、焼け跡に残った暖炉を巡る体験である。この暖炉に菊竹は、構造や素材、平面上での位置や屋根に突出する煙突の位置などを決定付けてしまうものを読み取った。つまり、この建物にとって暖炉とは中心的存在であり空間を決定づけるシンボルのようなものだと言える。そして、こういった存在は、全ての建築においてであると菊竹は論じている。これは、本稿で論じてきた菊竹の設計概念の背後にある原体験であると考えられる。

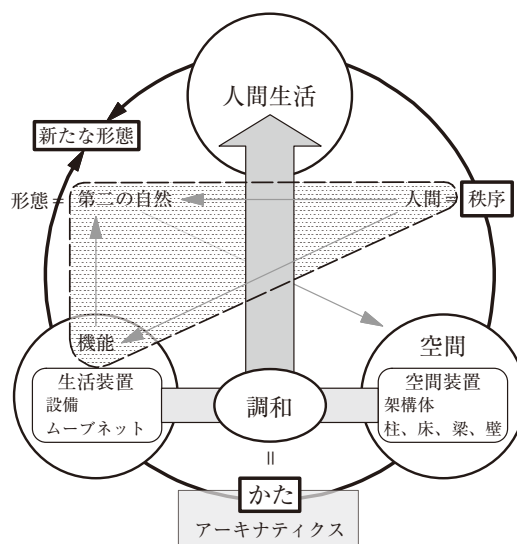


図5 菊竹初期の設計概念の構造

### 第6章 おわりに

菊竹初期の言説における「建築」と「人間」の関係に着目して、彼の建築制作をめぐる諸概念の構造を論じてきた。その結果は図5に示すとおりであるが、手短かに振り返っておこう。

第2章では、「形態」における創造の過程から「機能」から生み出される「形態」と、「機能」が消え去った「第二の自然」となる「形態」の本質を探った。第3章では、空間装置と生活装置の調和によって新しい形態が創り出されること、そして、新たな人間性こそ新たな形態の基盤であることが導き出された。第4章では、人間性に対する深い配慮こそアーキナティクスの概念であり、<かた>の段階における建築の設計を有力化する方法であることが分かった。第5章では、ここまでの菊竹の設計概念を照らし合わせながら、「か・かた・かたちの三角構造」を主軸として、菊竹の考える「建築」と「人間」の関係性を明らかにし、菊竹初期の設計概念の全体像を示した。

以上より、菊竹の捉える「人間」は建築における基本概念であり、設計概念における方向性の基点であると言える。

今後は本稿で明らかにした菊竹初期の設計概念を元に、彼の初期建築作品を分析して行きたい。

### 参考文献

「菊竹清訓／作品と方法」『建築』青銅社、1961年11月。  
 「菊竹清訓／作品と方法2」『建築』青銅社、1963年9月。  
 「菊竹清訓／作品と方法3」『建築』青銅社、1965年4月。  
 「菊竹清訓／作品と方法4」『建築』青銅社、1965年10月。  
 「菊竹清訓／作品と方法6」『建築』青銅社、1967年11月。  
 「菊竹清訓／作品と方法7」『建築』青銅社、1969年1月。  
 菊竹清訓『代謝建築論』彰国社、1969年。